▷昭和38年10月16日陶山神社での胸像除幕式の様子。胸像は日展作家・古川順三の作品。

大正時代有田で活躍した一人に深川六助がいます。明治５年１月29日、白川の窯焼き深川常蔵・セイの次男として生まれました。ちょうどこの年、国民皆学をめざす政府によって学制が公布され、有田でも元小城藩士江越礼太を迎え白川小学校（現有田小学校）が設立されました。

六助はこの江越校長のもとで教育を受けています。明治20年１月４日、文部大臣森有礼が教育視察の目的で九州地方を訪れた際、この有田にも立ち寄り有田小学校を見学。この時校長の推薦による選抜生として15歳で上京します。この時の様子を六助の長女星野房代さんは小学校から千歳橋まで全校生徒が並んで見送ったと聞かされています。弱冠15歳で神童と称された六助少年は青雲の志を抱いて東京へと向かい、森邸に寄宿しながら美術学校に通学。しかし２年後の憲法発布式典の日、森文部大臣は暴漢に襲われ翌日死亡。

その後叔父田代市郎治を頼って横浜の田代屋で働くことになります。この横浜で会津藩士望月弁三郎の娘キヨと結婚。戊辰戦争では敵味方として戦った肥前の青年と会津の女性がどのようにして出会い、結婚したかは定かではありませんが、森有礼が「余念なく相愛します」という契約結婚をしていたことも少なからず影響を与えたことが想像できます。

この後の約20年間の六助の活動は残念ながらあまり資料がありませんが、明治41年胸を患って療養のために帰郷してから５２歳で死去するまでの約10年間、有田の歴史の中に輝かしい業績を残しています。

品評会に付随しての蔵ざらえ（陶器市）の提唱、陶祖李三平顕彰碑建設の提唱、幼稚園の開設、県議会議員としての活動など。このころの様子を幼かった星野房代さんは「公の仕事などで家を空けることが多かったが、家にいるときは大勢の人がひっきりなしに相談事にきていた」と記憶しています。

大正12年３月５日肺炎のため死去。翌日白川斎場でキリスト教による告別式が行われました。死に先立つ１月15日付け『松浦時報』に「新春を迎ふ」という六助の一文があります。「自由とは我儘に非ず人に和するも亦自由なり（中略）各其職業の本能に生活し職分を守り職責を忠実に尽くす忠勇なる軍人でなければならぬ。産業立国の商工業者は此覚悟を要するのである」。

まさに疾風怒濤の如く大正時代を駆け抜けた彼の有田への遺言です。

深川六助氏については有田町史　政治社会編Ⅱ・商業編Ⅱにその業績が掲載されています。また『ふるさと』第３９号に宮田幸太郎さんが書かれた「文部大臣森有礼と深川六助」があります。

夫婦の墓地は白川にあります。また六助氏の胸像が陶山神社境内に建っています。

季刊
皿山春
No.37
有田町歴史民俗資料館・館報

発掘調査 裏のうら

有田で江戸時代に作られたやきものは、よく各地の美術館などで展示されたり、本などに掲載されています。つまり、今でもそれだけ文化的な価値が高いものと評価されているわけです。でも、何百年も前のものなのに、どうして有田で作られたことが分かるのでしょうか。しかも、いつ頃のものだということまで…。不思議だとは思いませんか？

もちろん証拠もなしに、誰かが勝手に決めているわけではありません。実は、こうした謎を解くための一つの方法が、古窯跡などの発掘調査なのです。また、やきものに関することに限らず、当時の生活や思想、技術をはじめ、さまざまなことを知るための重要な手掛かりも得ることができます。

でも、そうはいっても、なかなかイメージがわいてこないものだと思います。ですから、これから二回にわたり発掘調査がどのような手順で行われているのかご紹介してみたいと思います。まず今回は、材料集めのための現地調査編。次回は、その材料を歴史を語る資料とするための整理作業編です。

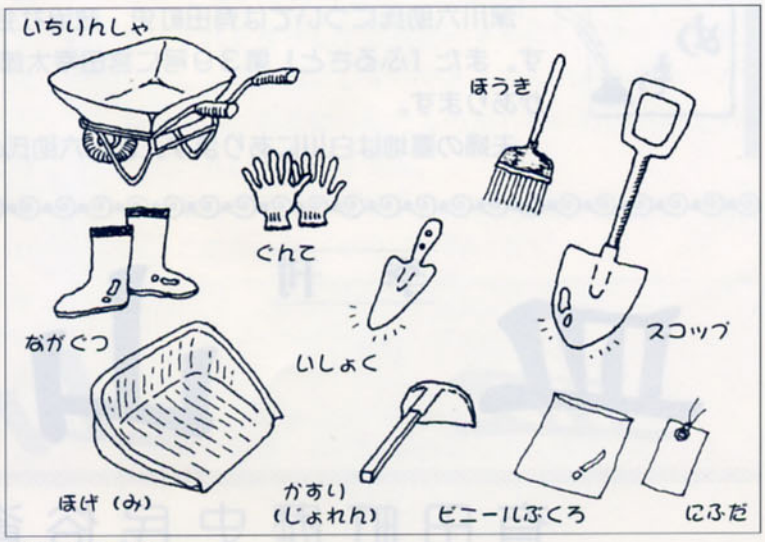
Part1 遺跡（いせき）

発掘調査をするのは、遺跡と呼ばれる場所です。遺跡は、先祖の人たちが残した生活の跡のことをいいます。外国などでは現在も地上に建造物が残った遺跡もたくさんありますが、木を用いることの多い日本では、その痕跡だけが地中に残っているのが一般的です。また、遺跡で発見されるものには、遺構や遺物と呼ばれるものがあります。遺構とは窯跡など現地から動かせないもの、遺物とはやきものなど持ち帰ることのできるものです。

遺跡を掘り終わったところ（小溝上窯跡）

Part2 道具（どうぐ）

発掘に使う道具には、いろんなものがあります。土の質などが違いますから、全国それぞれお国柄がありますし、呼び方もさまざまです。有田では、なんといっても最初は鍬やカスリ（ジョレン）が活躍します。よそでは、普通スコップで掘りますが、窯壁片や石混じりの有田の土にはまったく歯がたちません。次にあらかた掘りあがると、細かいところは移植ゴテです。また、掘り終わるとホウキできれいに掃除します。



発掘に使う道具

Part3

掘(ほる)る

発掘は、ただやみくもに土を掘ればいいというものではありません。考古学という分野で決まっているルールがあります。たとえば、土は堆積している土層ごとに、上から一枚ずつ順番に剥いでいきます。土層は、普通時期とともに下から順番に堆積しているからです。つまり、発掘では、土層を新しいほうから古いほうに、逆に掘っていくことになります。でも、こうして土層ごとに掘ることによって、出土した遺物の新旧が分かります。

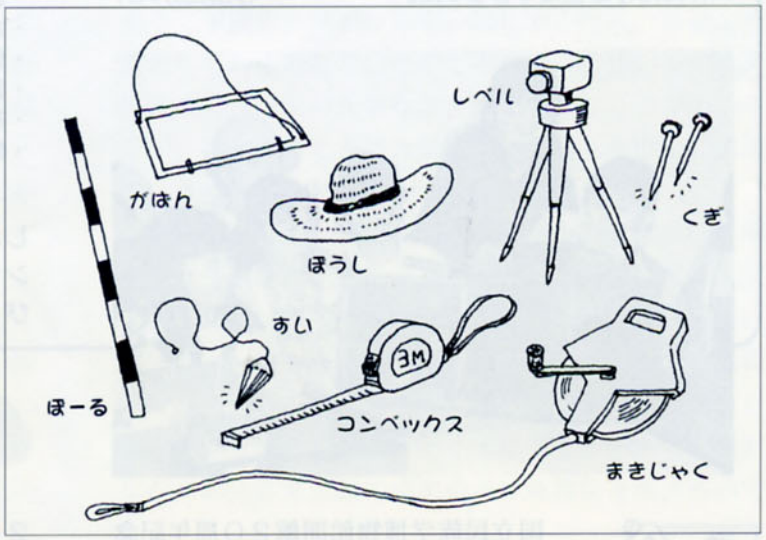
↑鍬などを使って、粗掘りしているところ。

→発見された遺構を詳しく調べているところ。

Part4

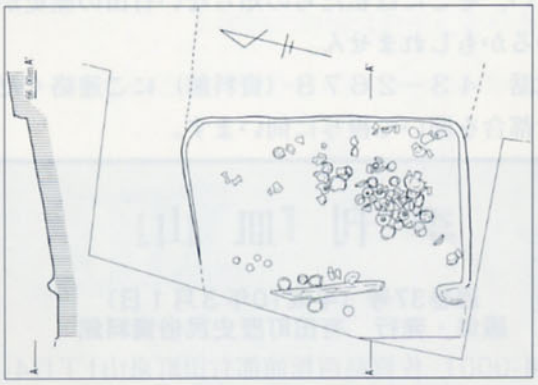
記(きろく)録

掘っただけでは、どういう遺跡が発見されたのかほかの人には伝えられません。だから窯の形や土層の堆積などを測って図面に書いたり、写真を撮ったりして、調査の結果を記録します。これで、ようやく遺物や遺構が、歴史を物語る材料として利用できるようになります。後はこの材料を持ち帰って、さまざまな情報を引きだす作業が待っていますが、それはまた次回ご紹介することにしましょう。



記録をとるための道具

こらむ 発見された遺構を図面にするとこうなります！



小物成２号窯跡

イラスト／菅原知子

有田小学校３年生　民俗資料館見学記

先日、有田小学校３年生が中尾・高瀬両先生の引率で来館。有田町では平成９・１０年度で「伝統文化教育事業」を推進しており、初めての試みで実際に資料に触ってもらうことにしました。その感想を届けていただきましたので紹介します。

・それぞれの名前や使い方がわかった。（緒方　巳果）
・昔の物の使い方がわかった。（古田　絢子）
・帽子が入らず残念だった。（吉富　　令）
・実物がさわれてよかった。（吉村　和真）
・昔の物にさわれて胸がワクワクした。（菅原　祥太）
・お金の大きさや使い方がわかった。（坊所　　武）
・前は少ししか知らなかったがわかった。（楢崎　あや）
・社会の勉強になった。（鶴田　拓也）
・カゼで休んだけど皆が教えてくれた。（成富　仁美）
・昔と今はちがうことがわかった。（小山しずか）
・さわらせてくれてありがとう。（中島紳一郎）
・勉強が進んでよくわかった。（大坪　隆佑）
・僕のすきなのは火鉢だ。（田辺　亮太）
・初めて見たのがあった。（多久島里奈）
・さわってみて昔のものが好きになった。（岩永　奈々）
・社会の勉強がすごく進んだ。（古賀めぐみ）
・休んだけど教えてもらった。（久保田あづさ）
・昔の物の大切さがよくわかった。（藤原まゆこ）
・本物を見れてうれしかった。（坂口　周平）
・お金やアイロンにさわれてよかった。（井手　史明）
・焼き物の湯たんぽがおもしろかった。（浦　みな子）
・昔のことを調べてよくわかった。（佐藤しづこ）
・保管してあるのを見れてよかった。（永尾　江梨）
・メガネや帽子、枕があってすごい。（太田としひろ）
・メモがいっぱいになった。（池田　梨沙）
・今度いければもう一度いきたい。（藤井　ゆう）
・私の家にはソロバンがある。（柴田　千春）
・僕のお気に入りは昔のミシン。（小川　英範）
・昔の物にさわらせてくれてありがとう。（江上　恭平）
・初めてさわれてうれしかった。（木寺かおり）
・形はちがっても使い方は同じだった。（金子　仁美）
・町に古い物があるとは知らなかった。（大川内　晋）
・昔の人は大変だったと思った。（木原　太朗）
・さわる時手がふるえた。（馬渡有香里）
・昔の人の生活がよくわかった。（高島ひろむ）
・道具の使い方がよくわかった。（牟田有り子）
・昔の道具を使って生活してみたい。（蒲地　あさ）
・お金は冷たくて重かった。（小島ふくし）
・こんなにあるとは思わなかった。（小栗あすか）
・資料館にはいろんなものがあった。（藤本三也子）
・すべて初めてでいい体験ができた。（篠原　めい）
・わかりやすい説明でよかった。（大坪しょう子）
・緊張したけど壊さなくてよかった。（山口　紘史）
・さわることができてよかった。（前田　拓哉）
・僕の家にも火鉢がある。（西山りゅうたろう）
・昔の物にさわれてよかった。（鶴田　　平）
・初めてさわって古いものだと思った。（冨吉　正美）
・帽子やメガネがあるとは思わなかった。（福地　真季）

子供たちの歓声が飛び交う中、質問も次々に出ました。目を輝かせながら寛永通宝を手にしたり、マントや山高帽を身につけ気分はすっかり“いにしえびと”でした。

ワンポイントラジャ

国立民族学博物館開館２０周年記念とうたった「異文化へのまなざし－大英博物館コレクションにさぐる」という展覧会が東京都の世田谷美術館で開かれているというので行ってみました。ついでに東京都美術館の「テイト・ギャラリー展」も見ました。英国絵画の所蔵では世界一と聞いていたからです。どちらもすばらしい内容でしたが、加えてちょっとしたカルチャーショックを受けました。世田谷でチケットを買おうとしたら「六十五歳以上は無料です」といわれました。それではと次の都美術館でも尋ねてみたら年齢を証明するものがあればといわれ、旅先の者だというと生年月日を聞いてあっさり通してくれました。東京都は年寄りに対してバスの無料券だけではなく、こうした文化面についても気配りをしているのです。有田でも参考にすべきことのように思いました。

（森田）

募集しています　昔の写真

当館が開館して２０年。二十歳を迎えた記念として２０世紀の有田皿山を写した写真をもとに「**我が家の一枚が語る有田の歴史**」展を企画しています。古い町の通りや日々の暮らしぶり、細工場や工場の風景などこれぞ我が家の一枚といえる写真を提供していただき、それを複写して大きなパネルにして展示します。

押し入れの奥にしまってあるアルバムを開いてみてください。そこには私たちの知らない有田の歴史が眠っているかもしれません。

電話　４３－２６７８（資料館）にご連絡ください。ご都合を聞いて複写に伺います。

季刊『皿山』

通巻37号（平成10年３月１日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館
〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185